
さよなら、おじいちゃん

水無月真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、おじいちゃん

【Nコード】

N7004C

【作者名】

水無月真琴

【あらすじ】

おじいちゃんが大好きな少女、サキ。彼女の思いを独白形式で綴った短編。

(前書き)

登場人物は彼女だけで台詞はありません。苦手な人は注意してください。

おじいちゃんはよく戦争の話をした。

戦争の話をするときのおじいちゃんの顔は、いつも懐かしそうで、楽しかった青春そのもので、それは修学旅行で行った長崎の被爆者の人の顔とはあまりにも違っていた。

原爆の光を見たという彼女は話をするときにしかめっ面をしていて、いつもこんな顔をしていたら疲れてしまっただろうな、という気分になった。彼女はこんな悲劇を二度と繰り返さないためにも、私のような若者に地獄でしかなかったときの情景を伝えて、自分の体験が風化しないようにと願っていた。

たぶん、何度も話しているのだろう。

被爆体験を語る彼女の口調はとてもなめらかで、話を聞けば聞くほど私が想像していた被爆者のイメージとの落差は広がっていった。衝撃で歪んで止まってしまった時計、影だけになってしまった人間、熱でねじれ原形をとどめていないガラス瓶、熱線で溶けてしまった皮膚、信じられないほどの犠牲者、写真や映像に残された本当に酷い光景。

でもそれらのものに何かの解説を付けるのは間違っている。

現実の世界とは隔絶したような光景が本当に実在したということがすでに証明されているのに、証明をさらに解説で補強する必要はないのだ。小説家が自分の作品を解説するくらい愚かなことだと思う。

写真や映像は酷い世界を想像するには役立つけど、解説はイメージを固定化してしまうから。

修学旅行なんかで来るべきじゃなかった。

ひとりで誰の解説も聞かず、写真と現代の長崎との情景の違いに

衝撃を受けてみたかった。

きつとその方が戦争の酷さを実感出来ただろうし、戦争のない世界というものを本気で願っていただろう。

私の想像力は彼女の饒舌さに萎えてしまった。

なのに彼女は、どんな感想を抱いたかと聞くこともなく、さも戦争は二度と起こしてはいけなないと思いましたが、あんな感想以外があり得ないと思いついてるようだった。

私はそれが腹立たしさを乗り越えて、彼女が可哀相に思えてならなかった。きつと自分が体験したことを伝えるだけで同情でなく共感が広がると思っているのだ。

でも同情はできても被爆してない私は共感することなんてできやしない。私に出来るのは痛みを想像するくらいだ。

おじいちゃんは戦争はひどいと何度も言ったけれど、悲惨だから二度としてはいけない、とは言わなかった。

世間でよく問題になっていた慰安婦も使っていたらしい。

戦場へ行くときなんか、これが最期になるかもしれないと思って、精一杯楽しんで、死ぬ気で遊んで、もう思い残す事はないという状態に自分を追い込むつもりで遊んだ。明日死ぬかもしれないと思って遊びのほかに楽しむのほかに楽しんで、日本に戻る船のなかでもうそれが出来ないかと確認して泣いた、とも言った。その時のおじいちゃんの顔は照れ笑いなんかじゃなく、本当に笑っていた。

おじいちゃんは、あの時のことはもう過去になってしまったからこんなに話せるんだよ、今はサキがいるから戻りたいとは思わない、それに戻るには年をとりすぎた、そう言ったおじいちゃんは心底嬉しそうだっただけだ。

たぶん、おじいちゃんは少しだけ戻りたいと思っていたのだろう

と今では思う。

でもそれは戦争になればいいというわけじゃなくて、若くて今より知らないことが多くて、今より少しだけムチャができたあの頃に戻りたいだけだったんだろう。

私以外の誰にも戦争のことを話さなかったけど、私の質問にはいつもよどみなく、隠すことなく、答えてくれた。私が関心を持っていることが嬉しかったんだ、きっと。戦争でなく、おじいちゃんが体験した戦場と、おじいちゃんそのものへの好奇心が、とてもとても嬉しかったんだと思う。

戦後に色んな事実を知ったはずのおじいちゃんの語る戦争体験はぜんぜん悲惨さを強調してなかった。

被爆者や学者がえらそうに実体験を語る態度とは違う、もっと思想もなにもなくてあの時感じていたことを喋る本当の体験談。今では映画や小説の世界にしかなくなった冒険みたいでカッコいい話。

でも何も美化されてなくて、人が簡単に死んでゆく、そんな世界を話せるおじいちゃん、戦争は二度としてはいけないと絶対に言わなかったおじいちゃん、自分が体験したことが戦争の全てだとは絶対に言わなかったおじいちゃん。

そんな祖父を私は尊敬する。

(後書き)

数年前に起きた実際の騒動に触発されて書きました。衝動書きしたので、この後のサキの物語は考えてません。

駄文を読んでもくださった方に感謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7004c/>

さよなら、おじいちゃん

2010年10月28日07時34分発行